

あるむぜお80

府中市郷土の森博物館だより

a/museo NO. 80

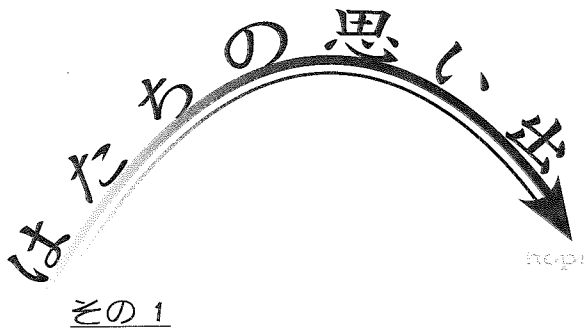
2007年6月20日



目次

- 1-3 はたちの思い出 その1
開館までと開館の頃
- 4 展示会案内 特別展
世界の昆虫博 2007
- 5 最近の発掘調査
武蔵国府・国分寺連絡路を発掘
- 6-7 ノート 瀬戸内の海に沈んだ武蔵国司
- 8 収蔵庫のニューフェイス
- 9 昨年度資料受け入れ・利用状況報告
- 10 展示室リニューアルトピックス ⑤-1

上：1987年（昭和62）開館直前、造成中の郷土の森博物館
下：2007年（平成19）5月 新緑の頃 ‘森’ になりました



開館までと開館の頃

朝倉雅彦

(元府中市立郷土館館長)

府中市民になられ、5月5日のくらやみ祭をご覧になると、興奮と感動で、一夕にして、府中が歴史と伝統に輝く町とお分かりになるでしょう。そしてきっと、府中におかれた国府とは？、江戸時代の甲州街道の府中宿は？などに関心をお持ちになります。

このようなご要望に応えるため、1968年(昭和43)、大國魂神社境内に図書館と併設した府中市立郷土館が開館しました。開館の意義は大きかったのですが、なにせ手狭で、また利用は徐々に減少してありました。「国府のおかれた町府中にふさわしい博物館を」は、郷土館の悲願となりました。

同じ頃、当時の矢部隆治市長さんは「府中に森が少ない。ドイツでは森は造るものだ」と言っている。府中に郷土の森を造ろう」と提案されていました。

また当時府中市文化財専門委員会議長だった宮本常一先生(今年生誕100年を記念して、郷土の森博物館で、7月1日まで「宮本常一の足跡」展開催)の念願は「経済の高度成長の波に乗って、府中の立派な古民家が一夜にして消えていく。今寄贈していただける古民家で民家園を」でした。

1976年(昭和51)の「府中市総合計画」では、これ等三者の底流は同じであるとして、これらを統合した「郷土の森」の構想が立てられました。

翌年、市民代表による「郷土の森構想策定協議会」が発足しました。協議会は熱気あふれるものでした。ごく基本について触れますと、博物館本館の規模は当初2,000㎡でしたが協議のたびに拡大し、答申では4,500㎡、用地は60,000㎡となり、内容は府中の歴史・文化・自然を総合的に学べる、地域における新しい形の総合博物館でした。

この協議会の答申は、市で全面的に受け入れら

れ、市議会で大賛同を得ました。

その後いろいろな歩みを経て、最終的な計画は、本館7,000㎡・用地137,000㎡となりました。1979年に市制25周年記念事業として「郷土の森」の建設宣言がなされ、鍬入れ式が行われました。

建設は博物館本館、民家園、用地の造成が同時に進行しましたが、当時の吉野和男市長さんがこの陣頭指揮をとられました。

1987年(昭和62)4月3日に、計画に4年、建設に8年かけた「府中市郷土の森」(2002年「府中市郷土の森博物館」と改称)の開館式を迎えました。その日は、素晴らしくよい天気でした。



1987年4月4日 一般公開の日に並んでくださったお客様

私は、この博物館の計画から開館まで携わった者のひとりです。この4月に開館20周年を迎えたと同じ感無量です。

開館の頃、スタッフは若い人たちでした。この皆さんが21世紀を先取りしたすべての事業を担当されました。10年もたった頃にはこの博物館の利用と運営は、立派に軌道に乗っていました。

開館20周年を迎えた今や「国府のおかれた町府中にふさわしい博物館」になりつつあると言えるのではないのでしょうか。

郷土の森博物館

の 目標と構想

開館以来、740 万人に達する方たちが、この郷土の森博物館を訪れてくださいました。この数字を見ると改めて、毎日、本当にたくさんの方々に支えられて来たのだと実感します。

20 年目の節目は、《これまで・そしてこれから》を考えてみるのにちょうどよい機会です。そこで、1978 年（昭和 53）に府中市郷土の森構想策定協議会が市に答申した『府中市郷土の森構想の策定について』から「目標」と「基本構想」のうち「1. 郷土の森とは」を採録することにします。

これこそが府中市郷土の森博物館の原点です。

「温故知新」の言葉どおり、ここに立ち帰り、そしてまた新しい未来を、来館してくださる多くの方と共に望みたいと思います。

府中市郷土の森構想の策定について（答申） 抜粋

I 郷土の森の目標

郷土の森は、市民が自分たちの生活している郷土を、自然や文化の面からよく知ることによって、その理解を深め、郷土愛・自然愛を向上し、さらに、市民としての誇りを高めることに役立つ場となるように、次のことを目標とする。

- 1 市民の知的レクリエーションの場となること。
- 2 あらゆる市民の、いろいろな利用にたえられる魅力ある場となること。
- 3 学校教育に役立つ場となること。
- 4 文化遺産を収集し、保存し、市民の郷土理解のために活用し、さらに、これらを後世に伝える場となること。
- 5 府中市の過去と現状を見つめ、未来を創造するきっかけが得られる場となること。
- 6 市民が誇りをもって他に紹介でき、また、市外の利用者が、府中を知る上で、不可欠のものとなること。
- 7 府中市の百年の計に立っていること。

II 基本構想

郷土の森について、その基本構想を次のように策定する。

1 郷土の森とは

(1) 基本的性格

人は、自然の中に住み、そのかかわり合いの上で生きている。

自然を舞台に、人間社会は時の流れの中で歴史をつくり、また、次つぎに新しい文化を生みだし

てきた。

この歴史と文化の源泉となるものが、地域の自然と地勢から生れた郷土の風土と、それに培われた人間の郷土気質である。これらが織りなされて、個性ある郷土の歴史や文化、そして、社会生活の形態が生まれてくる。

このようなことから、郷土の森は、府中における時の流れと、空間の広がり、そして未来を表現する立体的世界で、いわば、府中の縮図を具現するものといえる。

(2) 郷土の森と博物館

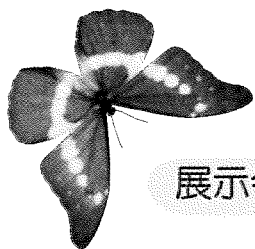
このような郷土の森の性格と機能は、まさに博物館のそれである。郷土の森は、単なる森をさすものではなく、自然と文化が融合した中から人の生活を見つめようとする、地域における新しい形の総合博物館として位置づけることができるのである。

(3) 郷土教育と博物館

現在、教育機関としては、学校をはじめ図書館、公民館等があるが、本物を見せ、触れさせ、感じさせ、発見させ、考えさせるという教育の原点ともいえる方法は、博物館活動の独自のものといえる。

博物館機能を、地域社会における学校教育や社会教育の面から見ると、博物館活動は、郷土に関するあらゆるものを対象として郷土理解を深め、新しい郷土の創造を目指そうとするものである。

このような見地に立つとき、博物館は、今日の教育の方向である幼児から老人までの人間教育という生涯学習に、最も適した施設といえる。



展示会案内

特別展

世界の昆虫博 2007

昆虫博である……

5年ぶり3度目の開催である。

夏休みともなると、毎年のようにあちらこちらで昆虫展が催され、博物館に限らずデパートや遊園地に及ぶまで賑わいを見せている。

が、しかし、本昆虫博は当館のオリジナルブランドである。

近頃はゲームやカードで外国産の大型カブトやクワガタキャラクター化され、プレミアでも付こうものなら小学生の間でもかなりの値段でカードが売り買いされている始末。その絶頂期もそろそろ過ぎた気配を感じつつ、便乗ではない博物館の昆虫展…開催の度に新たなテーマを持って作り上げてきた、入魂の昆虫展をご覧いただく機会が三たび訪れることになった。

7/21 土



9/2 日

大人 400 円 中学生以下 300 円
博物館入場料が別途必要

地球上に棲む生物種の8割を占めるという昆虫には、あらゆる場所に適応した姿や色が備わっている。時にはまるでエイリアンのようなグロテスクさを持つもの、思わず笑ってしまうほどの滑稽さ、本当に自然がつくった色彩なのかと疑うほど鮮やかなカラフルさ、周囲の環境に溶け込んで忍者のように存在を隠すもの、指輪やネックレスにしても遜色ない宝石のごとく輝く体を持つもの……何て多種多様な種族なのだろうと感心してしまう。

近年話題となっている、生物の多様性保全の重要性が、昆虫を見つめることで理解できるような気分になる。様々な場所で生きていくための生活戦略は、昆虫自身の体に装備されている。

そのあまりにも完全無欠な姿をできるだけ多く紹介することこそ、本昆虫博の根本であり開催の意義なのである。あまり難しく考える必要はない。見たままを驚けばいいのである。不思議に思えばいいのである。本当に神が創造したとしか思えないような神秘が、昆虫を通して垣間見られるはずである。そして多様な昆虫が生きていける自然環境の大切さを暗に訴えている展示の意図を感じてもらえれば、尚更うれしいのである。

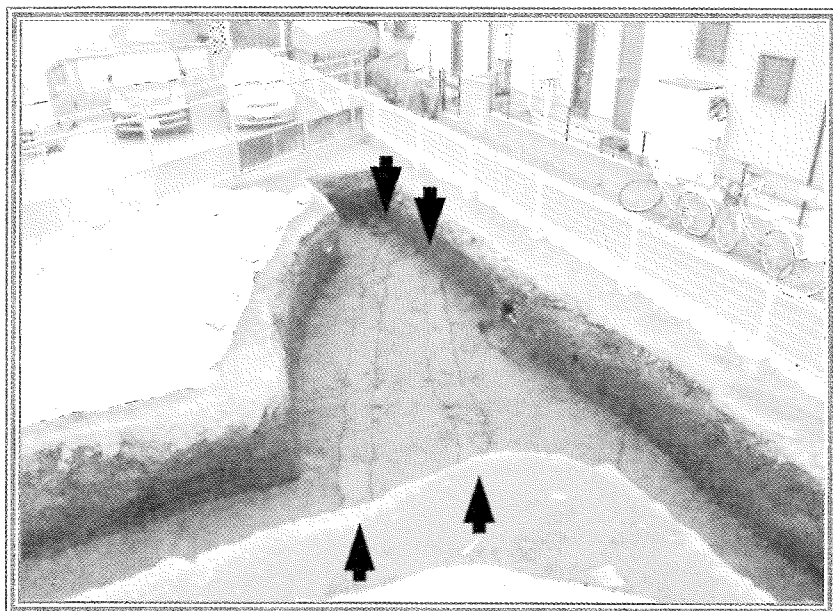
外国産の生き物については、^{ひょうばん}標本は別としても生体のまま持ち込むことが厳しくなっている現在だが、出来ることならなるべく自然状態に近い姿を見てもらいたい……もう一步進んで触れてもらいたい。自然教育普及の使命を負う博物館の責任において十分な管理の下、生きたカブトムシ・クワガタも公開し、かつ彼らの放された^{ごしせい}擬似生態空間の中にも入っていただこうと考えている。

見て、考えて、触れて感動する……本昆虫博の醍醐味はここにある。特に今回最大の試みは、昆虫の大きさ、奇抜さ、そして美しさを、聞いたこともないような国も含めて、全世界から約150カ国、1,000種を集め、可能な限り多く紹介するという点にある。
(中村武史)

最近の発掘調査

武蔵国府・国分寺 連絡路を発掘

栄町三丁目 府中市遺跡調査会 中條 寛



今回見つかった道路跡（矢印は特に硬くなっていた部分）

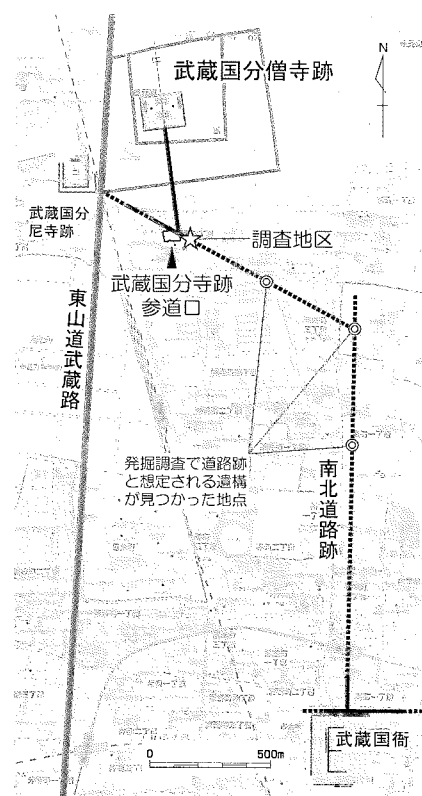
府中で初めて国史跡に指定された武蔵国分寺跡参道口から続く道路跡が、新たに発見されましたのでご紹介します。

場所は参道口の南東約 40m のところで、武蔵国分尼寺方面から武蔵国府方面へと斜めに向かう道路跡の一部になります。

この道路跡は幅約 3.7m の中央に、幅約 1.3m ～ 1.5m の硬化した路面があり、その両側の幅約 25 cm ～ 65 cm ほどが特に硬くなっています。当初、平行な 2 条の硬い面が続いている様にも捉えたので、牛に車を引かせる牛車や荷車の轍ではないかと想像をふくらませました。しかし平城京の発掘調査で数例発見されている轍は、車輪の幅が深さ 10 cm 程度窪んでいるとともに、同じ場所を何度も往來したことによってできた溝状の轍が幾筋もあって、明らかに今回の状況とは異なります。したがって、牛車の往來を想定するのは、難しいようです。

では、この道路は、どのような人達が使っていたのでしょうか。この道路跡の硬化面は、幅がかなり狭いのが特徴です。つまり多くの人が頻繁に行き交う道ではなく、ごく限られた人間が使用するための専用の道路だったのではないのでしょうか。こうした専用の道路を使用できる人物となれば、国司をはじめとする位の高い役人などを想像したいところです。

このような想像の可否はともかく、この道路跡が武蔵国府と武蔵国分寺を結ぶ最短の道路です。したがって、国府の役人である国司が国分寺に行くために利用していたことは間違いのないでしょう。国分寺は国衙から直線で約 2.5 km 離れた所にあり、徒歩で約 45 分かかります。国分寺は湧水が豊富で緑豊かな国分寺崖線を背にした景観の良い所ですので、天気の良い日にこのコースを歩いてみてはいかがでしょうか。



武蔵国府と武蔵国分寺の連絡路

武蔵国分寺参道口から南東に延びる道路跡は、武蔵国衙から真っ直ぐ北に延びる南北道路跡と、現在の東京農工大学付近で合流していました。この道すじの発見により、東山道武蔵路の他に国府と国分寺を結ぶ新たなルートが存在していたことが分かりました。

瀬戸内の海に沈んだ武蔵国司

—平知盛とその時代—

☆古代末期の武蔵国主と武蔵守

瀬戸内の海に沈んだ武蔵国司がいました。その名は平知盛。元暦2年(1185)3月、源氏に追われる平家の最後の戦い、壇ノ浦(山口県下関市)合戦でのことです。一ノ谷や屋島での敗戦から滅亡までの過程を見届けた彼は、『平家物語』によれば、「見るべき程の事は見つ」という言葉を遺して、海中に没した安徳帝らの後を追ったのです。

平知盛は清盛の四男で、異母兄には、父の横暴を諫めた賢人で早逝した重盛、同母弟には、南都攻撃軍を率い、囚らずも東大寺・興福寺を全焼させた重衡がいました。

当時の地方行政制度は、知行国制・在庁官人制といい、各国には名目上の知行国主がいて、その近親者が腹心の部下を国守に任命し、莫大な税収を得ることができる仕組みになっていました。彼らは任国に赴くことはなく、国府では在庁官人と呼ばれる有力武士たちが政務を担っていました。平家は政権を獲得していくなかで知行国制を利用し、一門が国主となった国は32に及び、その栄華を支えることになったのです。

当時、武蔵の知行国主は平清盛だったようで、知盛は9歳で武蔵守になっています。その後、知盛が国主となると、その息子知章が武蔵守になったと考えられます。

知章は一ノ谷の戦いで、父の身代わりとして討たれ、知盛は壇ノ浦で海中に没したので、東国武蔵国主・国守の肩書を持った親子二人は相次いで西国瀬戸内で命を落としたことになります。

☆歴史家・石母田正が考えたこと

この平知盛の「見るべき程の事は見つ」の言葉に重要な意義を見出したのが、歴史家・石母田正です。

平家の栄華と没落の過程を壮大に描いた『平家物語』のなかで、平知盛は次のような行動をとっ

ています。

平家の都落ちに際して、京都に抑留されていた東国武士は殺害されそうになりますが、これを制止したのが知盛でした。平家の運命が尽きているとすれば、百人・千人の首を斬ったとして何の意味があるか…、と。

一ノ谷で敗れ、落ち延びようとする知盛・知章父子。敵の武士に囲まれ、父を庇った知章は殺されます。これを見捨てて沖の舟に逃れる知盛。後にこのことを兄宗盛に告白して知盛は号泣しました。我が子さえ見殺しにした生への執着と利己心の恐ろしさ…。

運命を確信しながらも知盛はそこから回避しようとしません。最後まで戦闘的な武将であり、裏切り者も絶対に許しませんでした。こうした知盛の人物像は、『平家物語』の作者によって意図的に描かれたといい、石母田はそこにこの歴史書の構想を見て取るのです。

「見るべき程の事は見つ、今は自害せん」という知盛の言葉は、『平家物語』のなかで、おそらく千鈞の重みをもつ言葉であろう。彼はここで何を見たというのであろうか。いうまでもなく、それは内乱の歴史の変動と、そこにくりひろげられた人間の一切の浮沈、喜劇と悲劇であり、それを通して厳として存在する運命の支配であろう。あるいはその運命をあえて回避しようとしなかった自分自身の姿を見たという意味であったかもしれない。知盛がここで見たというその内容が、ほかならぬ『平家物語』が語った全体である。

☆民俗学者・宮本常一のまなざし

さて、平知盛は源平合戦の最中に瀬戸内海の周防大島(山口県周防大島町)に城を築いたと伝えられています。鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』の文治4年(1188)条に引用された文書に記されている伝承で、真偽のほどはわかりません。ただ、この地にあった荘園・島末荘は、平家と関わりの深い京都の最勝光院領であったことが知られています。

周防大島は著名な民俗学者・宮本常一の出身地です。島のほぼ中央、宮本の生家がある周防大島町長崎（旧家室西方村）の背後には、標高 374m の白木山（城山）があります。山頂からは三方に広がる海ばかりではなく、中国山地・四国・九州までが望めるのです。宮本は、子供の頃に薪採りにこの山によく登った思い出を語り、「見はらしがきくということは人びとに遠い世界へいろいろの思いをはせるものであった。」と述べています。そして、この山こそ知盛の城があった場所ではないかと宮本は考えていました。

その宮本に『大島源平盛衰記』という短編の歴史小説があります。1953 年、地元の村役場の広報誌に三矢茂人のペンネームで連載されたものです。

寿永三年（1184）一月のことです。平家は屋島児島の合戦に破れてついに九州におち、中国路は非常の飢饉におそわれて、まったく生色のないありさまでした。（中略）平氏はこの勢力を何とかして中国路のどこかで、いとめたいと思い、新中納言知盛をして周防国大島のうち島末荘に城をきずかせました。島末城は島の最中、四方に見通しのきくところであり、南北に海をひかえて作戦には便利なところにありました。これが今は平家の瀬戸内海における唯一の根拠地でした。

宮本は、城主の鵜野筑後守助経、主膳という息子とその若妻を登場させています。城を捨てて敗走した知盛。城主以下はこれを追って本隊に合流することを協議によって決定しました。残された若妻は絶望して死を選んでしまいます。

主膳の若い妻は他の女たちと城山へのぼってゆきました。そこからは西へ西へ漕ぎすすむ夫たちの乗った船

がまだ見えます。安下崎をまわってやがて見えなくなるまで、人々はじっと見送ったのでした。（中略）その夜、若妻はそっと館をぬけ出てゆきました。その翌日のこと、下田の漁師が生島の三ツ岩の間に、白蠟のように白くはかなげに事されている若妻の姿を見つけました。南の風の吹いている明るい日でした。（中略）鵜野助経が下関に下っていった翌々日、島末荘の人々は神ノ崎と浮島の間をおびたしい軍船の下っていくのを見つけました。「なんとたまげたことじゃ。生まれて初めてど…」

この小説では、その後の平家滅亡、東国武士の地頭としての着任、平家に焼かれた東大寺再建事業への地元の負担のことなどが語られ、平家から源氏へ世の中が移ってゆくころ、大島の人たちはずいぶん苦労したものでした。」と結ばれています。

☆源平合戦の時代—古代と中世、西国と東国

平知盛らが繰り広げた源平合戦の間は、古代から中世に至る大変革の時代でもありました。石母田正は『平家物語』に登場する一武将の行動を通して、変革期の思想を適確に捉えようとしました。宮本常一の視線は、あくまでも地域に暮らす人々に据えられ、日本の歴史の大きな事件に小さな一地域が組み込まれた格好になっています。また、日本列島を二分する西国と東国の歴史的な交錯もこの時代にあったとされますが、武蔵国司を冠した武将が東国武士に駆逐されていく経過に、それが象徴的に示されているように見えます。

*取りあげた本の出典

石母田正『平家物語』（初出：岩波新書 1957 年）
（『石母田正著作集 11 物語と軍記の世界』岩波書店 1990 年）
宮本常一『大島源平盛衰記』
（『宮本常一著作集 41 郷土の歴史』未来社 1997 年）



周防大島白木山からの眺望。左下は宮本常一の生家がある集落（2004 年 10 月）



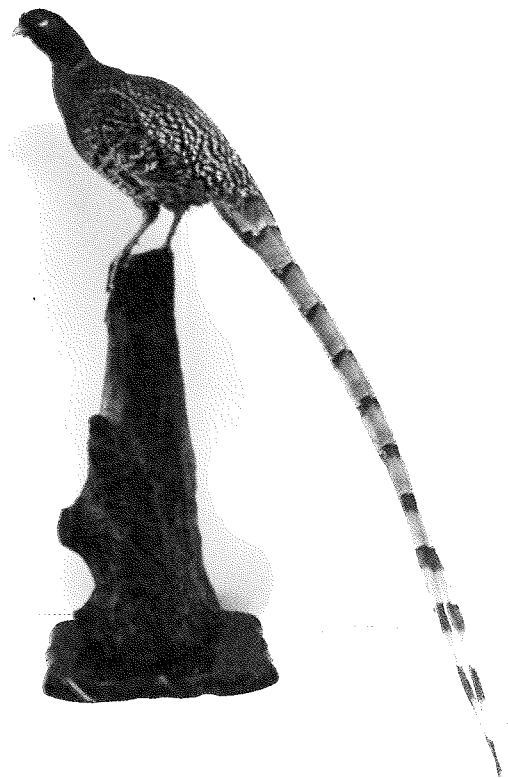
野鳥剥製 ヤマドリ

寄贈：早川弘一氏

昨年6月に市内朝日町の方から野鳥剥製が寄贈されました。亡くなったご主人が大切に保管していたもので、相当数の剥製がありましたが、状態の悪いものはお断りした次第です。府中周辺で見られることを基準に、コガモの♂♀と当館未収蔵のトモエガモ、さらにキジも加えて、収蔵価値の高いものについて喜んで頂戴しました。

そしてもう1点、大きさ、色、全体のフォームが何よりも真っ先に目についた剥製がありました。その野鳥は、過去の調査において一度も府中市域で確認されたことのない種類でした。本来は深い森林に生息する山の鳥……キジの仲間で、名前もそのままヤマドリと呼ばれています。

ヤマドリは、全長が♂で約1m25cm、♀で約55cmとかなり大型の野鳥です。♂の全身は赤褐色で尾が長く、竹の節のような黒色の縞模様があります。♀は全身淡褐色で羽に白い縁と黒色斑があり、尾は短く、飛ぶと先端部に楔形の白色部がある特徴的な姿をしています。一夫多妻で繁殖期の♂は顔の皮膚が赤みを増し、翼を羽ばたき「ドドド……」と羽音をたてます。キジ目キジ科に属しますが、キジは多摩川周辺でも確認されているのに比べ、主として標高1,500m以下の山地に一年中生息し、湧き水やせせらぎの流れる環境を好みます。日本特産種であるにもかかわらず、その生態はあまり知られていません。かつては毎年数万羽が狩猟鳥として捕獲されていましたが、1970年代から個体数が減少し、現在では対象からほぼ外れているようです。



記録にある地域は、本州・四国・九州にそれぞれ分布して繁殖し、地域によって色彩が異なる5亜種が分類されていますが、完全な狩猟対象外は、ヤマドリの♀とコシジロヤマドリという亜種で、他の4亜種の♂は地域や季節限定で認められているそうです。

今回寄贈されたヤマドリの♂は、東北地方で捕獲されたものだということです。採集年月日不明は残念ですが、貴重な資料には違いありません。

山地を持たない府中市域に、過去の確認例が無いのも当然ですが、奥多摩などを有する多摩地域においては、ヤマドリ生息の記述が認められています。近年の開発により食物連鎖の豊富な広葉樹林が減少、さらには植林により植生変化のない環境が生まれ、天敵であるキツネ・タヌキなども増えてきました。ゆえに生息数はかなり少ない準絶滅危惧種の扱いです。同じ多摩地域にある博物館だからこそ、たとえ府中で見られなくとも所蔵する意義がここにあるわけです。ましてや、最近の環境異常は計り知れないトピックスを提供してくれるので、今後、まかり間違っても郷土の森園内にヤマドリが姿を現さないとも限らないですから……

参考文献：津戸英守「多摩から減った鳥 増えた鳥」
（「多摩のあゆみ」第122号 2006年）

平成 18 年度
寄贈・寄託資料一覧

No. 15 三岡源太郎家文書受入状況



長持の蓋を開けると、ぎっしりと古文書が詰まっていました。



筆筒の引出し、革製の箱などにも古文書が……



No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	屋敷分下念仏講中	念仏講中道具一式	民俗	1 式	寄贈
2	十蔵寺澄子	ガリ版、はこ枕、小物類など	民俗	1 式	寄贈
3	岩崎五三郎	燭台	民俗	2 点	寄贈
4	榎本宗平	戦死者村葬通知書	民俗	1 式	寄贈
5	大室智夫	大祭関係資料	民俗	1 式	寄贈
6	広瀬孝昌	講中膳椀一式	民俗	1 式	寄贈
7	堀江甚吾	青年団八幡町支部旗	民俗	1 点	寄贈
8	桑田健一	洋服タンス、メガネ	民俗	3 点	寄贈
9	坂口組念仏講	坂口念仏講道具一式	民俗	1 式	寄贈
10	一ノ瀬利喜夫	軍服、千人針、アンカ	民俗	8 点	寄贈
11	野口忠明	中万道具	民俗	1 式	寄贈
12	内藤 治	蔵内の道具類	民俗	1 式	寄贈
13	大室政右	シメノウチ道具	民俗	1 式	寄贈
14	矢島 中	大田南畝書の襖紙	歴史	4 枚	寄贈
15	十蔵寺澄子	三岡源太郎家文書	歴史	1 式	寄贈
16	府中第四小学校	教科書類	教育	76 冊	寄贈
17	横山 節	土馬	考古	1 点	寄贈
18	早川弘一	野鳥本剥製標本	自然	5 点	寄贈

平成 18 年度利用状況

区分		有料		減免	合計
		一般	団体	(障害者・ 4 歳未満等)	
博物館観覧者 開館日数 308 日	大人	158,198	8,305	35,380	201,883
	子供	24,564	23,134	51,578	99,276
	小計	182,762	31,439	86,958	301,159
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数 289 日	大人	21,919	1,729	4,095	27,743
	子供	11,222	11,358	4,589	27,169
	小計	33,141	13,087	8,684	54,912

⑤ まずは「祭」コーナーから — 1 —

「くらやみ祭」とは？

郷土の森博物館は開館 20 周年を迎えました。これを契機に 2007 年度から 2011 年度にかけての 5 年間で、常設展示室のリニューアル工事をしていく予定であることは、前回までにお知らせしたとおりです。博物館の顔であり、活動の中核となる展示室が、いま生まれ変わろうとしているのです。

その皮きりとなるのが、第 1 のコーナーの「くらやみ祭」です。今回はまず、「くらやみ祭」とは何か、について、お話してみます。

「くらやみ祭」とは、大國魂神社の例大祭の通称です。武蔵総社としての由緒を持ち、府中の街のシンボリック的存在であったばかりではなく、国府とともに武蔵国の政治と信仰の要

の役割も歴史的に果たしてきた大國魂神社。

その年に 1 度の大きな祭は、夜中に神輿が出ることで知られ、「くらやみ祭」の名前があります。5 月 5 日の夕刻に 8 基の神輿渡御をクライマックスにして、3 日から 6 日の早朝にかけて、6 張の大太鼓や 21 台の山車の巡行、6 頭の馬による競馬式をはじめ、万灯大会や子供神輿の練り歩きなどが行われ、植木市やたくさんの屋台や見物客が出て、たいへん賑やかな祭となります。

また、4 月 30 日の品川沖に出かけて

神輿→
↓ 山車



の潮盛を皮切りに、この間には御鏡磨式・坪宮奉幣・御旅所神事など、由緒ある独特の神事が数々行われ、全体として盛大かつ神秘的で複雑な祭礼となっています。

府中の歴史と文化の特色として、国府と宿場と祭の 3 つを挙げることがあります。古代・中世の武蔵国府が置かれたことにより、府中は政治・文化の首都としての役割を演じてきました。近世には甲州街道の宿場町として再生したことにより現在に発展する街の基礎が作られま

した。「くらやみ祭」は、武蔵国府の総社の祭を起源にしていると見られますが、祭りと宿場町の人たちとは、長い間支え合う関係になっていました。この祭は、国府から宿場町へと続いてきた府中の長い歴史と住民の絆を今に生きた形で伝える一大イベントだと言えるのです。

新しい常設展示室では、こうした意味もあって、「くらやみ祭」を最初のコーナーに持ってきました。そこでは、祭の歴史やしくみ、これを支えてきた人たちの紹介がされることになっています。